

## 巻頭言

### 「他者肯定」で生きる図書館

西日本図書館学会大分県支部長

工藤 邦彦

十二代目市川團十郎（本名：堀越夏雄）は血幹細胞移植や輸血を繰り返す壮絶な治療を続け、さらには近親から骨髄移植を受けながら、江戸歌舞伎再生の道半ばでこの世を去った。訃報に接した時、フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーの『「侵入者」いまく生命>はどこに？（西谷修編訳・解説、以文社、2000年）』という著作が思い出された。ナンシーは、心臓移植を受けた自身の経験をもとに、心臓移植後、どう生きるのか？新たな「身体」となった心臓という“他者”をどう受け入れ、向き合うのか？検討している。

結論のみを申すとナンシーは「他者」を肯定<sup>注)</sup>し、“他者化の一途をたどるわたしの身体”を認めないと、最終的には「自己」を肯定できないと説いている。「他者」を否定することは、すなわち「自己」をも否定するにつながる。生きるとは「身体」とどのように「折り合い」をつけるのか、堀越夏雄も身体に負荷をかけるのは百も承知で「侵入者」を繰り返し受け入れ、「荒事」の團十郎を生かすことに専心したのであろう。

翻って、我が国の公立図書館の現状を見るに、自治体職員でサービスを遂行する純化路線はもはや本流とはいえず、業務委託、PFI、指定管理者制度、市場化テスト導入と、いわば「他者性」との折り合いが日々、行われている。利用者の利益を考慮すると、どの対処法にも一長一短があり、「課題解決型公共図書館」「魅力ある図書館づくり」へと変貌させる特效薬ではない。まずはそこで日々、働いている職員が図書館という「身体」をよく知ったうえで基礎体力づくりに励まねばならない。

低成長期にある現代社会のなかで図書館という「身体」を維持創成するには、ナンシーの姿勢である「他者肯定」をもって、図書館を捉えることが肝要と考えたい。

注) ナンシーの「他者肯定」について、身体論の観点から 稲垣正浩・藤井英嘉共著『スポーツ科学からスポーツ学へ』（スポーツ学選書 19）叢文社、2006年 第4章「スポーツ学」的発想の契機 p94-123 では、ナンシーの『侵入者』における自己の身体の「他者性」を普遍的な問題と位置づけ、「現代人の身体は日常的に他者化の一途をたどっている」と論じた。